

「毒」は耳かき 1 杯 止めどころを知る

凝縮の言葉 記憶呼び覚ます

いまの「朝日川柳」は 47 年前、1977 年 7 年に東京本社版で始まりました。初めは「日曜せんりゅう」と称し、週 1 回で 5 句の掲載でした。むろん、すべての句がはがきで届く時代です。

間もなく掲載を 7 句に増やし、2 年後には週 2 回にして「朝日せんりゅう」と改めました。そのあと週 3 回をへて、現在は週 5 回に落ち着いています。

古い掲載句を調べると、初期の入選者で今も投句を続けてくださっているかたが何人かおられます。東京都の尾根沢利男さん(80)もその一人で、中国残留日本人孤児の初訪日のときは〈戦争の影の長さが孤児の年〉の句が載りました。

古い新聞をめくって、他の投句者の当時の入選作を紹介しましょう。

〈政治家の手前で消える導火線〉

〈日本中おしん見ている気味悪さ〉

〈ブラウン管カタカナの名まだ続き〉

一句目は検察の捜査。二句目は大人気だった朝ドラ。三句目は日航ジャンボ機墜落事故です。あのときは緊迫の画面に搭乗者名簿の名が延々と続きました。

こうしてみると、すぐれた時事川柳には時代時代の記憶を喚起する力があるように思えます。凝縮された短詩は固形スープにも似て、脳裏で溶けて様々な回想を呼び覚ます味を秘めているようです。

川柳とは、滑稽で、おかしくなければならない、とは限りません。笑いは川柳の特色の一つですが、ことさら笑わせようとしなくてもいいのです。実際ニュースの多くは深刻だったり、悲しいったりします。〈死ぬかもと腕に名前をガザの子は〉。余計な言葉と感情を淡々と削いだこの句などは、それによって読み手の共感を呼んだことでしょう。

しかしながら、読み手をニヤリとさせて、誰かに教えて話題にしたくなるような句は、やはり捨てがたいものです。

かつて元首相の森喜朗さんが「女性のいる会議は時間がかかる」と言って総スカンを食いました。「森けしからん」式の句が殺到したのですが、中にはこんな句もありました。〈飯まだか風呂は沸いたか森だめだ〉。自分は亭主閑白のくせに世論の風によって森発言を非難するオトコの身勝手さを、理屈抜きで、視点もあざやかに切り取っていました。

笑いとともに「毒」も川柳には欲しい要素だと思います。ないとつまらないとも言えるでしょう。ただ難しいのはさじ加減で、スプーン 1 杯は多すぎます。耳かき 1 杯ぐらいのほうが利きもいいようです。たとえば世襲出馬の四世を詠んだ〈家系図で民主政治に挑戦し〉。これぐらいでじゅうぶん利いています。

ついでに申せば、川柳の風刺精神は揶揄や愚弄とは違うと思っています。揶揄とは「からかい」ですから、冷笑や嘲笑と同じく、川柳としては切り分けたいところです。権力や権威の風刺は時事吟のキモでもありますが、こき下ろせば川柳になるというものではありません。

ルーマニア出身の思想家のシオランという人が、皮肉とは「陰影に富んだ、軽い苦みのある無礼」であると言っています。続けて「少しでも深追いすると、皮肉は破綻する」と。多少の無礼はつきものとして、風刺や皮肉は「止めどころ」を知ることまた大事なのでしょう。

「日曜せんりゅう」の初回 1977年5月1日の紙面から

- 一日と三日政府に仕事なし 東京都 中村忠良
- タクシーに乗らずマラソン役に立て 東京都 山口秀生
- 老いの酒断ちて利下げに挑戦し 館山市 今翡翠 馨
- 連休はゴロ寝で協力自然保護 東京都 武藤散歩
- 福祉より仕事がほしい長寿園 武蔵野市 木浪孝一

◇朝日新聞ポッドキャスト「朝日川柳」配信中「朝日川柳」選者の山丘朗さんの川柳談義はインターネットラジオ「朝日新聞ポッドキャスト」で2回に分けて配信しています。

2人の選者は日々のニュースにしっかり目配りをしています。そのうえで、たとえば裏金捜査をめぐる〈検察は不起訴でせさせと貸しを積み〉を探ろうとするときは、この間の事実関係をもう一度確認してから掲載を決めています。

そして、お気づきの人もいるでしょうが毎日七句目には、いわゆる時事吟からは外れた句を採るようにしています。ユーモラスでほのぼののある句が多く読者のなかにも「七句目が楽しみ」という人がいます。投句に「七句目狙いです」とわざわざ書いてくる人もいます。

〈母の日や遺影決めろと娘言い〉

〈カミナリを絶対呼ばぬ様付けて〉

〈裏表ない人といて粗饒かな〉

〈入選者男が多い暇なのね〉というのもありました。むしろ女性の投句です。

たまにですが、七句目は投句者と選者の、いわば「掛け合い」の場にもなります。〈選ばれず類句多しの人となる〉の句に選者は「祝入選」と寸評を入れました。〈中七の治安が悪い私の句〉には「”字余り“を」。中七とは五七五の真ん中の音のことです。

〈柳壇で隣りあうのも他生の縁〉も七句目でした。川柳は千変万化の自在な表現による、ゆたかな文芸です。ご愛読を期待しつつ、さらなる投句をお待ちしています。

(山丘春朗・朝日川柳選者)

8月下旬に現代川柳編を掲載します。